学会報告

国際運動哲学検討会参加報告記¹

関 根 正 美 (日本体育大学)²

1. 概 要

2012年12月22日～24日の日程で、国際運動哲学検討会が台湾師範大学にて開催された。昨年度に日本スポーツ哲学会と台湾の身体文化学会ならびに運動哲学会との学術交流協定が結ばれてから、台湾で開催される学会大会に日本から初めて参加した。参加者は、遠藤会長、瀧澤副会長、畑理事長、舩本前会長、近藤前理事長、深澤理事、劉國慶会員（千葉大学大学院）、関根の8名である。今回の学会は、台湾の年次大会を国際学会として組織したもので、日本以外にも中華人民共和国、韓国から招待者および参加者があり、プログラムに記載されていた参加者数は99名であった。プログラムは、一般研究発表（口頭、ポスター）のほかに、キーノートスピーチ、シンポジウムなどで構成されていた。オープニングセレモニーでは、日本体育・スポーツ哲学会を代表して遠藤会長が挨拶に立ち、台湾の学会への謝辞と今後の学術交流への抱負を語った。以下、日本からの参加者が行った発表演題をプログラム順に記す。

2. 研究発表

一般研究発表（口頭）

12月23日(日)

9:00～9:20 畑孝幸（長崎大学）・関根正美（岡山大学）

What can we get from defeat in competitive sports?

9:20～9:40 舩本直文（首都大学東京）

Insufficiency of the youth Olympic Games as the peace movement

9:40～10:00 遠藤卓郎（筑波大学）

The significance of student's self-recognition in physical education: Seeing through the iceberg model

9:40～10:00 劉國慶（千葉大学大学院）

A prospect of school physical education in China

12月24日(月)

14:10～14:30 深澤浩洋（筑波大学）

The possibility of empathy with others in competitive sport: Suggestion from Nishida's 'Pure Experience'

キーノートスピーチ

12月23日(日) 10:30～12:00

近藤良享（中京大学）

Medicine or sports medicine, therapy or enhancement: At the focus on "Beyond Therapy"

遠藤卓郎（筑波大学）

Making a line from points, and then making a plane: our research exchanges on the philosophy of sport

関根正美（岡山大学）

The movement of sport philosophy in Japan

また、キーノートスピーチのセッションでは劉一民氏（国立台湾師範大学）が台湾を代表し

¹ The 2012 International Conference on the Philosophy of Sport

² Masami SEKINE, Nippon Sport Science University, 7-1-1 Fukasawa, Setagaya-ku, Tokyo, Japan. 158-8508

て、The embodiment of athletic skill reconstruction—a genetic phenomenological approachと題して講演を行い、その他にも朴貴順氏（韓国霊山大学）、毛振明氏（北京師範大学）、李波氏（清華大学）が講演を行った。ちなみに朴氏は金沢大学で、毛氏は広島大学で学位を取得されている。

3. おわりに

一般研究発表の傾向ならびに特徴としては、近代スポーツ以外を対象にした研究が比較的多かった点が挙げられる。たとえばヨガ、太極拳、中国の伝統的武道、テコンドーなどを対象とした研究が比較的に盛んに行われていた。この点は日本での学会や他の国際的な学会とは異なる点であるといえる。その一方で身体経験に焦点を当てたり、現象学的方法を用いてスポーツ現象を解釈しようという研究もいくつかみられた。この点は日本の研究動向と接点があるといえよう。

学会の晩餐会の席上、北京師範大学の毛振明教授と同じテーブルに着くことになった。この時に毛教授から広島大学に留学されておられたことを聞いた。日本語が堪能なわけである。本学会誌にも論文を書いている周愛光華南師範大学教授とは北京体育大学の同級生で、この学会が終わった後に中国の会議で会う予定だという。毛教授は早速その場で、筆者の兄弟子である周さんに電話をかけてくれた。

今回のキーノートレクチャーで、遠藤会長が東アジア地域でのスポーツ哲学研究を通じた交流をアピールされた。そのためには学会への継続的な相互の参加が不可欠である。世代ごとに、また世代を超えて交流することもある必要があり必要なことだろう。その意味で、今回は若い研究者とあまり交流できなかったことが残念である。次に参加する機会があれば、その時は台湾の若い研究者世代との交流も積極的に果たしたい。

会場となった国立台湾師範大学の正門